廣讃寺ジャーナル

第183号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

敬う

尊敬する人、敬える人はいますか。親だったり、上司だったり、偉人だったり、いろいろな人が頭に思い浮かぶと思います。

なぜ敬えるかを考えると、その人はすごく優しいから、その人はすごく頭の良い人だから、その人はすごく仕事ができる人だから、など性格の良さや優れた才能や肩書きに、すごいなと思っている程度ではないでしょうか。

自分の物差しで尊敬できるかを決めています。そして尊敬といっても何かあれば我々がする尊敬なんてものはすぐに吹き飛びます。

お釈迦さまの時代に、王子が父である王を殺すという事件が起きました。王子はダイバダッタという人にそそのかされていたのです。そのエピソードは仏説観無量寿経の中に出てきます。このダイバダッタはお釈迦さまの教団を混乱させたり、お釈迦さまを殺そうとしたりと、いわゆる「悪人」でした。

しかし親鸞聖人はこのダイバダッタという人も含めて誰ひとり欠けることなく存在したために、親鸞のもとに浄土の教えが届いたとおっしゃられています。

お釈迦さまだけではなく、ダイバダッタも含めた全員を有り難いと敬われています。

本当に尊く思う気持ち、敬う気持ちは仏の教えに出あわないと起こらないものです。

慶讃と報恩（5）

―宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年―

田中 智教

五十年に一度の大法要、慶讃法要の年に当たり筆をとった「慶讃と報恩」の連載もついに最終号となりました。全五号の連載として親鸞聖人の御誕生と立教開宗の意義について書き進める中で、前号では、金子大榮師の「報恩」の理解について「他に移すのが本当の報恩、報いるという意味」との言葉をご紹介したことです。その「他に移す」とは他者と通じ合うことです。ここで私が強く思うことは、親鸞聖人の御恩に報いるためには他者との「共感」「共通」「共有」が重要であると思うのです。他者と共感したいと思う気持ち、個別の人生ではあるが他者と共通しているという実感、独占的ではなく他者と共有（シェア）する考え方など、「報恩」を通じて私に与えられた方向性ではないかと思うのです。

また、「慶讃」についても同様のことが言えると思うのです。「慶讃」の漢字の意味は「よろこび　ほめたたえる」であり、元となる言葉は親鸞聖人が聖徳太子を憶って詠われたご和讃に出でくる「慶喜奉讃」であると聞き及びます。この「よろこび」も、一人だけ嬉しかったら良いというわけでなく、誰もが共通してよろこぶことができるものが本当の「よろこび」でありましょう。「ほめたたえる」ということも、家の中で一人、「親鸞聖人すごいなあ」と思うことは感心するだけに留まってしまうのではないかと思うのです。そのすごいことを他者に伝え、伝えたことによって他者がよろこび、他者と共感することができて「ほめた

たえる」が成立するのではないでしょうか。

そこで、私としては「他者を通して自己を省みる」という方向性が、現代社会に生きる私たちにとって大切なことではないかと申し上げたいのです。積極的に、意図的に他者と通じ合いたいと思い取り組むことによって、自身の在り方を反省し自己を形成していくとでも申しましょうか。他者との関わりを表だって考えることの重要性を感じるのです。

先日も、ある友人から「個の自覚」と言われてもよくわからないと相談されました。これは同朋会運動のスローガンとして語られてきた「家の宗教から個の自覚の宗教へ」の中に用いられる言葉ですが、私という個体が主体的に信仰に目覚めていくことを「自覚」という言葉で表されているのだと思います。しかし、家の宗教すら薄れる社会の中で、何を促されているのか判然としない人も少なくはないだろうと思います。現代というグローバル社会において、言語も違うような他者に真宗を伝えたいと思う取組みから、真宗から遠ざかっていた自己に気づいていくような営みが現代に必要であると「慶讃と報恩」から考えさせられたことでした。（完）

一生過ぎやすし

一周忌の法事の時に施主さんから「今日は一周忌で来年が三回忌ですよね、そのあとはまた七回忌で、そのあとは十三回忌。それを五十回忌までやらないといけないのですか」とたずねられました。こういう質問はよくされます。

施主さんに答えます。「ではご自分の年齢に五十を足してください」そう言うと「ああ、もう私が死んでるな」と言われます。

配偶者の法事を生きて勤めようとすると十三回忌までくらいでしょうか。親の法事を生きて勤めるのも二十三回忌か二十七回忌くらいでしょうか。

いわゆる順番通りでいくならば、父親を亡くし、母を亡くし、夫を亡くしというところでしょうか。もちろん順番なんてありません。しかし自分の順番がまわってくるのは意外とあっという間です。

そして自分が死んだら何年かでだんだんと忘れられていきます。そして死んで五十年もたったら名前くらいしか覚えられていないかもしれません。

行事予定

六月二十八日（水）十時　親鸞聖人ご命日のお勤め
同朋会例会

報恩講の日程変更のご案内

先月号でもお伝えしましたが報恩講の日程の変更をお知らせします。

コロナにより報恩講は十一月三日のみ勤めておりました。今年から諸事情により、日程を十月の最終日曜日とさせていただきます。

今年の報恩講は十月二十九日（日）となります。どのように勤めるかはまた役員会の打ち合わせで決めていきたいと思います。